昭和57年5月17日第3種郵便物認可（毎月3回1日・11日・21日発行）　第376・377合併号

学校教育新聞

（旬刊）© 学校教育新聞社

発行所
学校教育新聞社
東京都板橋区蓮根1―21―10
郵便番号174
電話03(3969)2580(代)
郵便振替口座　東京3―41996
〒176―91　練馬郵便局私書箱46

日本国勢図会
世界国勢図会
正確な社会統計資料集　発行 国勢社　電03-3212-3910

夢館（ゆめやかた）いまる　奥州藤原歴史物語

'93年NHK大河ドラマ「炎立つ（ほむらたつ）」の舞台、平泉

今を遡る900余年の昔
京の都から遠く、美事に花開いた
奥州平泉の黄金郷に
等身大のロウ人形で再現
真の歴史教育に貢献
推奨団体 (財)協和協会・時代刷新会

平成4年7月20日（月）、今日の佳き日を寿ぐが如く、晴れわたる大空のもと、ここ奥州は平泉の黄金郷、みちのくの地、戦乱の世に多くの武将たちが夢馳せたところに、『奥州藤原家四代』の〝夢館〟が建立された。ロウ人形による歴史人形館である。これは、（財）協和協会と時代刷新会の両団体が推奨し、観光歴史館株式会社が建設したもので、戦後おろそかにされてきた歴史教育を見直し、日本の歴史・伝統を大切にする心をはぐくむ推進活動。この教育施設が今後の歴史教育に役立つこと大であろう。

式典　この日、日本晴れの大空のもと、燦々と注ぐ太陽のもとで、午前10時30分より、夢館の前庭において各界代表の手による「テープカット」が行われた。

参館　夢館に立つ、それぞれの技術者の至芸の技のもと完成された、生けるが如き人物像の迫真の姿に、強く強くひきよせられ、唯々深い感動をおぼえる。

〝百聞は一見にしかず〟歴史教育の真髄ここにある。観る思いである。

夢館いま甦る　平泉に『初代清衡が築き、基衡、秀衡時代に黄金期を迎え、奏衡時代に滅亡した奥州藤原氏。平泉を舞台に栄華を極めた百年間のその歴史を「興味をもって、楽しく、わかりやすく、そして正確に」をテーマにパノラマ形式で展開したのが当館です。歴史的に有名な場面を、世界最高レベルのロウ人形を中心に再現し、居ながら当時の歴史を体感できる画期的な歴史館で、教育施設としても最適な施設で、30億の資金と2年の歳月を経て造営されました。』

（浅野弘毅）

夢館
奥州藤原歴史物語
平泉の歴史概要

『東大寺の造営、そして未曾有の大仏「毘盧舎那仏」の鋳造を契機に、鍍金のための黄金が国中で探し求められた。その時、みちのく涌谷（現宮城県涌谷町）で金が採掘されたことから、一躍みちのくが注目され、中央政権の支配強化が始まったのである。その結果、在地の勢力と中央政権との間で再三にわたって戦火が交えられ、ようやく安定したのは坂上田村麻呂の遠征によってであった。

しかし、その支配下から再び在地勢力の雄として頭角を現してきたのが岩手を中心とした安倍氏であり、秋田を本拠地とする清原氏であった。

やがて、安倍氏と中央政権、清原氏との間で交戦が生じ、いわゆる「前九年の役」へと発展した。長きにわたる戦乱も、清原氏が政府側に加担し、安倍氏を滅亡に追い込んで終結をみた。しかし、やがては清原氏の内紛から「後三年の役」が起こり、みちのくは再び戦乱の地と化した。「前九年の役」のさなかに生を受け、数奇な運命にもてあそばれながら成長し、ただ一人安倍、清原の流れを汲む人物として生き残ったのが藤原清衡であった。また、前役では源頼義、後役ではその子義家が中央側の将軍として活躍し終結をみたが、朝廷側ではその功績を正しく評価せず、源氏にとってみちのくは遺恨の残る地となったのである。

清衡は、みちのくでの地歩を固めていくと同時に、義家の庇護のもと、中央貴族社会との交流を深めていった。そして、機をみて豊田館（現岩手県江刺市）から衣川を越えた平泉の地に居館を構え、仏教を施政の根幹に据え、みちのくの平和と安定の基礎を固めたのである。

清衡の施政は三代にわたって受け継がれ、広大で肥沃な領地からの産物、黄金、駿馬をはじめとする特産物によって支えられた豊かな経済力と天性の政治感覚から、平和で安定したみちのく、そして他に例を見ない質の高い文化を「平泉」を中心に築き上げていった。しかし、源頼朝、義経との確執、そして国家的変革の波に巻き込まれ滅亡したのであった。』

（荒木　伸介）

ロウ人形による歴史人形館の建設運動推進

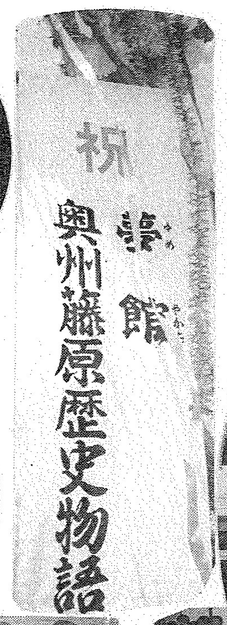
穂積昭慈町長

NHKエンタープライズ高橋康夫氏

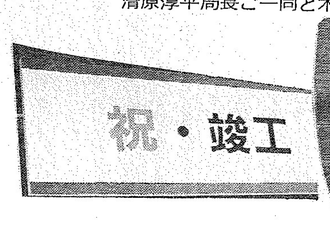
観光歴史館㈱ 浅野弘毅社長

木村睦男会長

清原淳平局長ご一同と木村会長



夢館



祝宴会場

夢館竣工式典・祝宴

『（財）協和協会（会長福田赳夫元首相）、時代刷新会（会長木村睦男元参院議長）、の両団体

いずれも岸信介元首相が創設したもので思想、派閥を超えて「国家・民族・人類のためになることは、時代を先取りして研究・推進してゆこう」との趣旨で、活動しております。

両団体は、これまでに五〇本以上の政府宛て要請書を作成し、総理・各省庁大臣へ提出してきております。

今回は、主として当団体の教育部会、伝統教育部会から六～七年前から出ている課題で、我が国は占領軍によって歴史・伝統教育が疎かにされてきたことから、歴史教育は無味乾燥な年表暗記ものとなり、児童・生徒も歴史は暗記もので難しいと認識するにいたり、我が国の歴史・伝統教育がおろそかになってきております。

しかし、本来の歴史教育は、それぞれの歴史的事件の時代背景・動機・活躍した人物の生い立ちや人となりを検討して初めて、歴史の真相が分かり歴史を学ぶ面白さが会得できるのであり、現在のような年表暗記では歴史の面白味も分からず伝統的なものも廃れてしまいます。

そこで、私共は、長年、政府へ歴史・伝統教育の推進を進言してまいりましたが、数年前より、それならば当団体自体で出来る限りの歴史・伝統教育を推進しよう、ということで努力してまいりました。

この運動の一環として、当団体では、テレビ映像時代ということもあり、歴史考証をしっかりしたロウ人形による歴史人形館の建設を全国的に推進しており、まず、宮城県松島で好評を得ている伊達政宗の一代記の主要場面をロウ人形で展示している「伊達政宗歴史館」を支援するのを初め、いま、日光にて「徳川家康歴史館」を進めるなどしておりますが、このたび、三～四年前から推進していた岩手県平泉の中尊寺脇に建設しておりました「夢館・奥州藤原歴史物語」が完成し、この七月二十日に現地で、オープンセレモニーを行うことになりました。』

（事務局長　清原淳平）

祝宴

於金鶏荘

式典終了後、全員で夢館の〝文化遺産〟、〝芸術至芸の人物像を、それぞれ感慨深く拝観して回り、深い感動をおぼえた後、全員で祝宴場に向かった。

浅野弘毅社長より挨拶

『親しい友人から、夢館建設の話があったとき、門前町には、浅草や善光寺があって、この話は成功すると信じ、夢中で取組んで来た。各界の協力のおかげで感謝する。

特に女性陣の朝に夕に、の協力には、深甚の感謝を捧げたいと思う。』

（要旨）

木村睦男会長挨拶

時代を刷新する会
元　参議院　議長
協和協会　代表

『藤原四代の歴史を物語る歴史館＝夢館（ゆめやかた）を拝見して、100年の昔を彷彿とさせる。

浅野社長の努力と地元の皆様方の協力のおかげです。

戦後の日本の教育では歴史教育が行われず、青少年に祖国日本の真の文化・歴史を教育していないので、この方面に最大の努力を進めたい。

その意味からも、夢館の功績は顕著であります。』

（要旨）

穂積昭慈平泉町長挨拶

『最近では歴史等に対する関心が高まっているが、地元に生まれ、地元に育って、すべて知りつくしていると思っても、様々の見方があって、〝知ってるつもり〟が、そうでないことも、わかりました。

時代時代によって評価が違っております。

藤原氏も、かつては、日の当たる存在ではなかったが、今やその価値が見直されて、NHKの大河ドラマとして放映されることになったのであります。

このように、奥州藤原文化が、〝日の目を見る〟期において、夢館のオープンは、誠に、タイムリーを得たものと存じます。おめでとうございます。』

（要旨）

源義家

〝八幡太郎は恐ろしや〟
剛勇安倍貞任・同宗任も一目をおいたという。

義家の強弓は、清原武則が木の枝にかけた、三領の鎧を見事に貫いた。

衣のたては
ほころびにけり
年を経し
糸の乱れの

（源　義家）

苦しさに

（安倍貞任）

『さばかりの戦いの中に、やさしかりけることかな』と

吹く風を
なこその関と
思へども
道もせにちる

山桜かな

（源　義家）

〝奥州三古関〟のひとつで、源義家が、後三年の役のおり、奥州に下った際に、勿来関で詠んだものである。

（文責記者・文中敬称略）

「夢館・奥州藤原歴史物語」
〒029―41　岩手県西磐井郡平泉町平泉字衣関十三番一号
電話　〇一九一―四六―五〇

一一
東京事務所
〒102　東京都千代田区麹町3～12～7
電話　〇三―三二六三―四七四三
エイチ　ティーズビル3F

迫真のロウ人形で表現（全30余景の一部）

複雑な家庭の中で成長する清衡

頼義を裏切った経清は捕えられ鈍刀で斬殺された

幼い清衡を抱いて不安な気持ちで夫の出陣を見送る

清衡7才母再嫁、清衡忍従の生活

清衡は家衡の闇討ちを受けるも、堀にとび込み逃げる

源頼義は安部頼時討伐に長期九年かかり清原参戦で安部氏滅亡す

兄頼朝に追われ、平泉へと落ちて行く義経・弁慶の名場面

平家打倒に馳せ参ずる。秀衡の制止も及ばず

雁列の乱れ伏兵あり、草むらに放火して勝利、清原氏滅亡す

身体中に矢を受けながら義経を守ろうとする弁慶の立往生

義経「八艘飛び」

平泉で6年間武芸に励む

【場面展開】

弁慶の立往生の場面のあとは、奥州藤原氏の滅亡から、頼朝率いる鎌倉軍が、平泉を炎上させた場面へとつづく。

最後は、松尾芭蕉が「夏草やつわものどもが夢の跡」という名句を残した場面で終わっている。